

映画同好会 キネマ月報



2021 年 7 月号 (通算第 10 号)

メンバー's エッセー

- | | | |
|----------------|-------|------|
| 1.【映画を見ると得をする】 | 石原正之 | P2 |
| 2.【映画の思いで】 | 谷口雄二郎 | P3-4 |

映画情報	【映画館上映作品情報 2021 年 7 月】	7 作品	P4-6
	【NHK-BSP シネマ放映予定 2021 年 7 月分推薦作品】	10 作品	P6-9

映画評	<TheFather ミニ特集> <その他の映画評>	P9-16
今月の情報エトセトラ		P16-17

映画同好会予定表・新入会員紹介	P17-18
編集後記	P18

※表紙: 未だマスクを外せぬ中、人々は 7 月の陽光に誘われ街に繰り出す

メンバー's エッセイ(1)

映画を見ると得をする

石原正之

作家の池波正太郎が「映画を見ると得をする」訳を、エッセイ風に幾つかの例を挙げながら語っている。例えば、映画を観ようとする時は、日本語でいい題名がついているものはハズレがない、外国映画の大作は画面の厚みが違うので絶対観ておくべきだ。なぜ映画を観るかといえば、自分の知らない人生というものをいくつも見ることになる。そして、映画を長いこと観ていると、だんだん人間が灰汁ぬけしてきて、粹な人間になって行く、と断言している。成程とは思ふ。

先日、映画同好会の Zoom 会で、会員の本田安弘さんが NHK ラジオテキストの「シネマレッスン—主人公が教えてくれること—」を紹介してくれた。私は日頃、映画評で本田さんと共感することが多いので、すぐに読んでみた。映画評論家の青柳秀侑氏が 28 本の作品を解説しているのだが、映画ファンの私でも「旅立て！少年」で取り上げられていた「スタンド・バイ・ミー」と「ニュー・シネマ・パラダイス」を見ていなかった。いつか見ようと思っていたところ、家内が NHK プレミアム・シネマと民放のロードショーから撮り留めしているリストの中にあるという。早速、ワクワクしながら観た。前者(少年たちの好奇心の旅)からは、素敵な音楽に胸を震わせながら自分の少年時代を思い起こしていた。後者(老人が少年の旅立ちを押す)からは、18 歳の時に、一人息子の私を兵庫の田舎から東京の大学へ行かせてくれた父を想起した。

サラリーマン生活を終えて、五木寛之の言う「白秋期」の最終時期にいる私には、この 2 作はたまたま自分の来し方を振り返らせる時間をくれた。映画というものは、もともと面白いものだが、いい映画を見終わった後の心の高揚感と充実した時間は、映画を見て得をした気分になる。それが積み積みって人間の「質」を高めてくれているのだろう。//

メンバー's エッセイ(2)

映画の思いで

谷口雄二郎

この世に生をうけ私が初めてみた映画は、小学生のとき【鐘のなる丘】という題名の映画でした。先生が先導し、学校全体で見る映画でした。よき思い出であり、今でも同映画の主題歌を時々思い出すときがあります。「緑の丘の赤い屋根、とんがり帽子の時計台、鐘がなりますキンコンカン……」。

爾来、映画に興味もち、父親に連れられてみた「憧れのハワイ航路」、岡晴夫と美空ひばりの共演。当時は時代劇全盛時代で、料金は4円99銭・3本立てが普通でした。小遣金をためて、日曜日によくみたことを記憶しています。東映のスタートでもあります。時代劇スターの誕生でもあります。中でも特に忘れられないのが【大菩薩峠】です。中里介山の伝説の長編小説を映画化した大作時代劇でした。最初は内田吐夢監督・東映の片岡千恵蔵主演で撮り、次に大映の市川雷蔵を主役にして作り、3作目は藤本真澄プロデューサーが、岡本喜八監督・仲代達也主演。岡本監督は代表作【独立愚連隊】（これは当時、反戦映画しか作られなかった日本映画界では珍しい、徹底して娯楽性を追求した戦争冒険アクション映画でした）、が世間のイメージは、主人公の机竜之介が無差別に人を斬りまくる設定につきこの作品は、批評家と監督の評価は分かれています。

でも、アメリカでは熱狂的に受けたようです。特に黒人がたにです。チャンバラがすごかった。仲代は撮影で10日間、ずっと人を斬りまくりました。あれだけチャンバラで人を斬ったのは、ギネスブックに載るほどで。とにかく最後の20分間くらいは斬りっぱなしであり、それが外国で受けたんだろうと思う、と当時を語っています。

この辺が、アメリカの西部劇に通じているのかも。

ジョン・フォード監督、ジョン・ウェイン主演【駅馬車】は、その代表作です。ジョン・ウェインの【黄色いリボン】の哀愁に包まれた老兵、【赤い河】の目的のためには温情を許さない牧場主。【リオ・グランデの砦】、【アパッチ砦】【リオ・ブラボー】【アラモ】なども記憶にあります。

ゲイリー・クーパーの【真昼の決闘】【平原児】【征服されざる人々】【悪の花園】
カーク・ダグラス【OK 牧場の決闘】【チャンピオン】【ガンファイター】【大西部への道】

バート・ランカスター【許されざる者】【アパッチ】【OK 牧場の決闘】
スティーブ・マックイーン【荒野の 7 人】【ネバダ・スミス】

.....

学生時代までは、よく映画をみましたが、社会人になって今日までほとんど見ていません。
先日、コロナのおかげでよいことがありました。テレビ 4 c h で（7 日・14 日）【タイタニック】
懐かしく、拝見することができました。

ジェームズ・キャメロン監督 レオナルド・ディカプリオ ケート・ウィンスレット
名作ですね。何回みても飽きません。あのような恋愛をしてみたかったですね。
DF の皆さんにお会いして、近況を聞くのが楽しみです。//

映画情報

※キネマ月報 6 月号では映画館上映作品情報という括りで、大手/名画座の区別はせずに上映される映画の中から推薦作を列挙しました。これが好評でしたので、大手シネコンも復活しつつありますが、月報では引き続きこの括りで推薦作品をご紹介します。（編集部）

【映画館上映作品 7 月度】（推薦者、真木郁夫）

1:「シンプルな情熱」(フランス・ベルギー)

7月2日(金) Bunkamura ル・シネマ 電話 3477-9264

監督 ダニエル・アービット

主役 セルゲイ・ポルーニン、レティシア・ドッシュ

恋の高揚感と幸福感、その裏側の痛み、自分自身を発見し人生を自由にはばたくためと分かる。愛と官能の物語。 カヌ国際映画祭公式選出作品

2:「83歳のやさしいスパイ」(チリ)

7月9日(金)シネスイッチ銀座 電話 3561-0707

監督 マイテ・アルベルデイ

私立探偵にやとわれた老人が老人ホームに入居しその内情を調査するドキュメンタリー映画である。アカデミー賞長編ドキュメンタリー映画賞ノミネート、各国映画祭で作品賞ノミネート

3:「クレストーン+ヴィクトリア」(アメリカ)

7月17日(金)シアターイメージフォーラム 電話 5766-0114

①②両作品でそれぞれ理想郷か世界の終わりを問いかけるドキュメンタリー作品。

①「ヴィクトリア」

監督 イザベル・トレネール

ロスから車で2時間にあるカリフォルニア・シティ。かつて大富豪が砂漠にゴルフコース、道を作りそのまま消えた。この地に人生をやりなおすため、ラシェイ・ウオーレンが移り住んだ。ドキュメンタリー作品。

ベルリン国際映画祭フォーラム部門で最高賞授賞

②「クレストーン」

監督 マーニー・エレン・ハーツラー

コロラド州の聖地クレストーン。ここにラッパードが住み、ユートピア作りを目指していたが、山火事が近づく彼らのコミュニオンが崩壊しはじめる。

4:「ジャッリカトゥ(牛の怒り)」(インド)

7月17日(土) シアター・イメージ・フォーラム 電話 5766-0114

監督 ジョー・ジョーズ・ペツリシェーリ

インドケーララ州で脱走した牛の群れの暴走とそれにかかわる人間模様を描いた作品。国際映画賞インド代表作品

5:「復讐者たち」(ドイツ、イスラエル)

7月23日(金) ヒューマンラストシネマ有楽町 電話 6259-8608

監督 ドロン・バズ ヨアブ・バズ

主演 アウグスト・ディール

ホロコーストを生き延びたユダヤ人マックスは妻子が殺されたことを知ると復讐心に燃え、信じられない計画を立てた。

6:「ココ・シャネル」(フランス)

7月23日(金) Bunkamura ル・シネマ 電話 3477-9264

監督 ジャン・ロリターノ

主演 ココ・シャネル フランソワーズ・サガン

ココ・シャネル、最もエレガントで、最も手ごわく、最も寛大で、最も執念深い、最も象徴的で、最も謎めいている。そしてだれよりも未来を見ていた。自由で自立した女性の没後50年、NO5誕生100年記念公開のドキュメンタリー映画

7:「プロミシング・ヤング・ウーマン」(本項推薦者：小西順)

7月16日(金) Toho シネマズなど。

監督：エメラルド・フェネル

主演： キャリー・マリガン (「17歳の肖像」「華麗なるギャツビー」など)

クリエイターとして幅広く活躍するエメラルド・フェネルが、自身のオリジナル脚本でメガホンをとった長編映画監督デビュー作。2021年アカデミー賞脚本賞受賞。監督、主演女優など5部門にもノミネートされている。

ごく平凡な生活を送っているかに見えるが、実はとてつもなく切れ者であるキャシー。彼女には周囲の知らないもうひとつの顔があり、夜ごと外出する謎めいた行動の裏には、ある目的があった。明るい未来を約束された若い女性(＝プロミシング・ヤング・ウーマン)だと誰もが信じていた主人公キャシーが、ある不可解な事件によって約束された未来をふいに奪われたことから、復讐を企てる姿を描く。//

【NHK-BS シネマ放映予定 7月放映推薦作品】(推薦者 真木郁夫)

1:「カサブランカ」(1942年アメリカ) 7月1日(木)13時

監督 マイケル・カーティス

主演 ハンフリー・ボガード、イングリッド・バーグマン

キネマ月報10月号ですでに取り上げた作品だが、何度でも扱いたくなる名作である。仏領モロッコのカサブランカが舞台のラブロマンスであるが、戦時中の反ナチスのプ

ロパガンダ映画でもある。仏の警察所長、クラブのウェイター、黒人ピアニストなど名脇役の存在と主題歌「時の過ぎゆくままに」、「君の瞳に乾杯」など粋な会話が映画の質を高めている。アカデミー賞作品、監督、脚色賞受賞。

2:「ワイルド バンチ」(1969年アメリカ) 7月2日(金)13時

監督 サム・ペキンパー

主演 ウィリアム・ホールデン、アーネスト・ボーグナイン

バイオレンスとリリシズムの作品が多いサム・ペキンパーの最高傑作と呼ばれる。

ウイスキーをラッパ飲みし、男の友情には死をも辞さぬという荒くれどもを惜しみつつ描いた秀作で、最後の西部劇と呼ばれている。

3:「慕情」(1955年 アメリカ) 7月8日(木)13時

監督 ヘンリーキング

主演 ウィリアム・ホールデン、ジェニファー・ジョーンズ

香港を舞台にしたメロドラマ。アカデミー賞 劇映画音楽賞、主題歌賞受賞

4:「クイール」(2004年 日本) 7月12日(月)13時

監督 崔 洋一

盲導犬クイール(ラブラドル・レトリバー)の一生を描く。

犬好き必見の映画。

5:「シャイン」(1995年オーストラリア) 7月13日(火)13時

監督 スコット・ヒックス

主演 ジェフリー・ラッシュ、ノアテ・イラー

オーストラリア実在の天才ピアニスト デイヴィッド・ヘルフゴットの半生を描く。

デイヴィッドはロンドンの王立音楽院に留学し、ピアノコンクールで難関のラフマニノフ「ピアノ協奏曲第3番」を見事に弾きこなしたが、その後精神に異常をきたす。アカデミー賞、ゴールデングローブ賞、英国アカデミー賞それぞれ主演男優賞受賞。

6:「ポセイドン アドベンチャー」(1972年 アメリカ) 7月15日(木)13時

監督 ロナルド・ニーム

主演 ジーン・ハックマン、アーネスト・ボーグナイン

81000トンの豪華客船「ポセイドン号」の転覆事故に遭遇した乗客の脱出劇。

アカデミー賞視覚効果賞受賞

7:「ボディ ガード」(1992年アメリカ) 7月19日(月)13時

監督 ミック・ジャクソン

主演 ケビン・コスナー、ホイットニー・ヒューストン

フランク・ファマー(ケビン・コスナー)とレイチェル・マロン(ホイットニー・ヒューストン)のラブロマンス。

ホイットニー・ヒューストンが歌う「オールウェイズ ラヴユー」は全世界4200万枚の大ヒット曲になった。

2012年2月 ビバリーヒルズのヒルトンホテルで急逝したホイットニー・ヒューストンは 48才の若さでその早すぎる死は惜しまれている。

8:「シコふんじゃった」(1992年 日本) 7月22日(木)13時

監督 周防正行

主演 本木雅弘、清水美砂、柄本明、竹中直人

廃部寸前の大学の相撲部に入った大学生の奮闘を描いたコメディ。

ブルーリボン賞、日本アカデミー賞最優秀作品賞、キネマ旬報第1位

9:「許されざる者」(1992年アメリカ) 7月23日(金) 13時

監督 クリント・イーストウッド

主演 クリント・イーストウッド、ジーン・ハックマン、モーガン・フリーマン

ビッグウイスキーという町の酒場で、重傷を負わされた娼婦が、二人のカウボーイの首に賞金をかけた。このため各地から賞金稼ぎがこの町にやってきた。

町の治安を維持する保安官はこれ等の人間を追い払う。従来の単純な善悪の西部劇ではなく、暴力の本質を見つめた質の高い人間ドラマである。

アカデミー賞作品、監督、助演男優賞、編集賞、を受章した秀作である。

キネマ旬報第1位の作品である。

10:「ミッドナイト・イン・パリ」(2011年アメリカ、スペイン) 7月29日(木)13時

監督 ウッディ・アレン

主演 オーウェン・ウィルソン、レイチェル・マクアダムス

小説家を目指すギル・ペンダーは婚約者のイネスとパリを訪れる。そこでイネスの友人ポールと出会い三人でパリの街を回る。ある夜の12時、酔ったギルは、アンティークカーに誘われ不思議なパーティに参加する。そこで、1920年代の著名人 ヘミングウェイ、ジャン・コクトーに出会う。翌日も同様なパーティに行く。現代と過去を行き来しながら、著名な作家に自分の小説の問題点指摘をされた。イネスとの関係も不倫が疑われ再考することにもなった。アカデミー賞脚本賞受賞。

映画評

※月報5月号の推薦映画、アンソニー・ホプキンス主演の”The Father”をご覧になった会員が多かったようで、複数の感想が寄せられました。そこで先号の本田さんの映画評に続き、今号では Father ミニ特集として、3 会員の感想を並べて掲載させていただきます。(編集部)

① 映画「ファーザー」を観て (野村俊彦)

第93回アカデミー賞主演男優賞をアンソニー・ホプキンスが最高齢(83歳)で獲得、加えて脚本賞も受賞した映画「ファーザー」。

物語の主人公は、主演男優と同名の認知症の男・アンソニー、同年齢しかも同じ誕生日の83歳と話題性豊かなイギリス・フランス合作映画。

出演者は数名、物語はほとんどフラット(家)の中での撮影。
どんな映画か? 観賞前は話題性のみの知識で、なんか「身につまされるな」と思いながらスクリーンに向かいました。

主人公は、現役時代、多分エンジニアとして特段ドラマチックな人生を送ったでもなく、相応に中流生活を過ごしたどこにも居る一市民(老人)。

残された人生に不幸にも? 認知症を患い、娘らの愛情いっぱい介護を受けながら生きていく何の変哲もない一老人の物語かと・・・。

介護施設の窓外の公園には、風にそよぐ緑色濃い木の葉、ベッドで「ママ、ママ」と、「母」を想いながら介護の女性の懷に抱かれ、泣き叫ぶ孤独な父親アンソニー。「葬送曲」が流れ、「老人の最期の生き様」を感じさせるラストシーン。長い、長いエンドロールもあり、しばらく立つことにためらいがありました。

「老い」を迎えた父親アンソニーが認知症になり、娘（アン）は同居して、仕事を持ちながら献身的に介護し、父親は、マイペースで安楽に過ごす。

そんな中、娘のパートナーは娘に度々、父親をホームに入れろと迫る。父親は、2人のその会話を聞いてしまい、娘は父親にバツの悪さを見せ、安心してくれと部屋に送るが、娘自身の気持ちは揺れ、葛藤する。父親は、娘と同居することを当然と信じ、ホームに入居などまったく考えない。しかし、父親はパートナーから脅迫のうえ入居を迫られ、時に暴力をも振るわれると妄想する。

ファーストシーンから、認知症の父親の頭脳の中の混濁する発想や動きを、娘との行動（現実の出来事）と交錯させ、観る者を混乱させる。

父親は、「大切な」腕時計がいつも気になり、腕に無ければ「介護人に盗まれた」と言い続け、認知症特有の「もの盗られ被害妄想」症状が出る。

娘は、新しく介護人（若い女性）を雇う。父親は、その女性との初対面に、プライド高い性格から、普段は無頓着な身なりにこだわり、女性に会うとハイテンションになり、タップダンスを踊りだす始末。また介護女性が、父親の頭脳の中では、事故で亡くなった次女によく似ていると妄想し、不在時には不機嫌になる。

認知症の父親の会話には、いつも自信たっぷり、威厳あり、ユーモアもあり、エンジニアとしてかなり知的だが、自己中心的なふるまいがひどくなる。

娘は、パリで仕事に就く夢を持っているが、父親に逡巡し、躊躇し実現できない。しかし、父親はだんだん強度の認知症になって混濁し、「私は誰だ」「何が何だか分からない」と、現実と自分との区別がつかなくなる。

娘は、ついに父親を介護施設に入れ、父親を残し自分の人生を生きていく決心してパリへ行く。

認知症の父親は、介護施設に入所したことが理解できないまま孤独に旅立つ。

《余談》

年老いて「今」を生きる認知症の父親と将来に向かって生きたいと願いながら、介護に費やす娘の人生との葛藤に結論を出す。

父親は、英語が通じないパリへ行くべきではないと妙な理屈で、強く同居を望むが、娘は、ロンドン・パリは父親を見るには近い距離とする。

(確かに、10 数年前のフランスは英語が通じにくい時期はあった?)

娘は父親の孤独死にどんな想いを抱くのだろうか?

父親・娘との愛情あふれた生活を描いた映画だが、辛く悲しく「やるせない嘆息もれる感情」が残った。

《余談の余談》

私の「ファーザー」は、内科開業医。ある日深夜、急病人あり往診して帰宅後、入浴し、部屋に戻り、患者さんの様子見で待機中「脳卒中」にて倒れた。59歳。
以降、自分自身居た大学病院に入院、回復の兆し少なく、私や家族は見舞いに訪れるが会話が難しい状態が続き、数年後、他界した。

多忙を極めていた父親と一緒に食事をした記憶がほとんどない。
大戦時には、軍医として従軍。南の島から数少ない生存兵として帰還。
柔道で鍛えた強い身体のようなだったが、医者の不養生がたたったか?
もう少し、長生きして酒でも飲みながら「大人の会話」したかった。//

② 5月号で、本田さん推薦の「ファーザー」を見てきました。(横山洋)

老人の認知症とその父を守ろうとする娘の愛情の物語。父の認知症が進行していく様を、父の目を通してミステリアスに描いており、時に、どちらが真実か分からなくなる。自信と確信に満ちた父アンソニーの表情が、一枚一枚記憶が薄れて次第に絶望に変わっていく苦悩の表情と、それを見る娘のアンの、泣きたくなるのをこらえている表情が、観客の涙を誘う。気丈な父が、まるで子供のように振る舞い、親子の関係が逆転していくことの戸惑い、切なさを描いている。終章で、父の寝室の窓の外の景色が変わったことは、娘のアンが、自分で認知症の老父の面倒を見ることを断念したことを意味するのであろう。観た後で、認知症に関わらず、人に優しくしようと思わせられる作品です。(アンソニー・ポプキンスが「羊たちの沈黙」以来、2度目のアカデミー主演男優賞を受賞しているが、娘役のオリビア・コールマンの演技も素晴らしい) //

③「ファーザー」の件、感想文を下記いたします。（小西順）

痴呆症を記憶が錯乱する本人の視点から描いているので観客である我々も錯乱するという効果を狙ったフロリアン・ゼレール監督も素晴らしいと思いましたし、何よりも主演のアンソニー・ホプキンスの演技が圧巻でした。

また、痴呆症患者の観点だけでなく、就寝中の父親アンソニーの首を絞めるという娘のアンの妄想場面や、アンの夫がのしりながらアンソニーの頬を打つという場面も挿入されており、痴呆症患者を取り巻く周りの人たちの苦悩もうまく描かれています。

最後の場面でアンソニーが子供のように泣きじゃくりながら、「ママ、ママ！」と母親を呼ぶところでは身につまされる思いがしました。

劇中、アンソニーが聞いていた CD のオペラについて、帰宅後調べたらビゼーの歌劇「真珠採り」の aria である「耳に残るは君の歌声」だとわかりました。ゼレール監督が意図を込めて選曲したものだと思います。

なお、本作の音楽はルドビコ・エイナウディというイタリアの作曲家で、あの「ノマドランド」でも音楽を担当していたとのことでした。

良い映画だと思いました。//

④「グロテスクな怪優アンソニー・ホプキンス」（菅原信夫）

なぜか、アンソニー・ホプキンスの映画に足が向いてしまいます。正直に言って、その動機は怖いもの見たさ、です。「羊たちの沈黙」での物理的な怖さもありますが、それ以上に彼の役には精神的な混乱をきたすようなものがあり、精神的な怖さというのでしょうか。「ファーザー」における彼は認知症による精神の混乱があるのですが、自分の身に置き換えるとこれは非常な恐怖です。どんな映画を見ても、自分自身の過去のエピソードが重なるのが私の映画鑑賞姿勢における問題だと思っているのですが、「ファーザー」を見ると、アメリカでロシア研究をしていた時に 2 年間お世話になった下宿のロシア人のおばあさんを思い出さずにはおられません。留学最後の半年間は、彼女の「ものがなくなった」という幻想に付き合わされ、苦しむための時間だったように思えます。「ファーザー」でホプキンス演ずる父親は、自分の時計が盗まれたという幻想に苦しみますが、同時に周囲もそれに巻き込まれます。自分も将来、そんなことを起こすようになることがゼロとは言えないことが私の恐怖の理由です。本作の後、6 月には「ハワード・エンド」という 1992 年の作品を見ました。ここでも、ホプキンスはかなり複雑な役に挑戦していて、本当に怪優だという印象を強くしました。//

その他の作品

【劇場】『名もなき生涯』（寺田弘）

昨年、3月有楽町のTOHOシネマズシャンテで観た映画。『天国の日々』『シン・レッド・ライン』など、難解な映画作りに終始していたテレンス・マリック監督が、初の実話映画化で素直に観客の心をゆさぶった。舞台はオーストリアの山と谷に囲まれた美しい村。第二次大戦でのドイツ進駐によって一人の農夫が、どうしてもヒトラーへの忠誠に違和感を感じて兵役を拒否した。妻はその夫の心情を理解し、寄り添う。とたんに周囲の人々が二人を白眼視して、つばを吐きかける始末。

三人の娘のあどけなさや自然点描のすばらしさに息を呑む。夫は死刑になるが、妻は決然とその地で生きることを誓う。信念を貫く人間を描く静謐な作品。

作家ジョージ・エリオットの詩が脳裏に蘇る。「歴史に残らないような行為が世の中の善を作っていく 名もなき生涯を送り—— 今は訪れる人もない墓にて眠る人々のお陰で 物事が さほど悪くはならないのだ」 //

【劇場】『いのちの停車場を見て』（伯田 頼彦）

映画館再開後6月2日渋谷東映で鑑賞しました。12名ほどの観客で密には程遠い状況でした。そもそも映画館などは感染リスクを感じられず科学的データも示さず一方的な閉館指示などは、大いに憤慨しています。

この映画は東京の大病院から父が居る出身地金沢の終末医療を行なう診療所に転身した吉永小百合扮する女医の物語です。それぞれ死を迎える7組の患者とその家族の行き方死に方にどのように医者は寄り添うのか淡々と描かれています。各エピソードは重いのですが、日常的に接していく医療側の態度をあまり感情移入させず演じた吉永及び若手の松坂桃李広瀬すずの演技は素晴らしかったと思います。何が正解かがないテーマで観客にそれをゆだねる、感じてもらうと映画だと思います。患者、家族側も泉谷しげる、柳葉敏郎、石田ゆり子、小池栄子、南野陽子などベテランを配し映画を奥深くしていました。西田敏行はいつも通り役に上手くはまり切って吉永の演技を際立たせていたのが印象的です。成島出監督が金沢の素晴らしい風景を実に上手に切り取り映画のやさしさを増幅させていました。

診療所の経営問題、stationという食堂との関係など多少気になる部分もありましたが映画全体には影響なく秀逸な映画でした。

最後に 自分の父親(田中泯)が脳の誤作動という難しい病気で全身の痛みが耐えられないに状況で父が望む早期の臨終をどう扱うのかという安楽死の問題が提起されました。日本ではそれは罪になると言う事は十分承知でも、父の希望は叶えてあげたいというギリギリの選択に迫られた時、医師も患者の家族も今の日本で本当に苦しむと思います。日本の医学界はもとより政治も国民も早期の議論の上方向を出すべき時期だと思います。これこそこの映画の究極の問題提起ではないかと思いました。安楽死に関して「ブラックバード 家族が家族であるうちに」が6月11日から上映されています。

この映画で自分と自分の身体に注意深く向き合う事の大切さを改めて考えました。エンディングを考える年頃の私にとっては良い映画でした。//

【配信】「泥の河」 (織本 聡)

コロナ禍で映画館行は止めて、もっぱら Amazon、Netflix 配信を PC で見ている。古い映画も見られるし、途中で止めて続きを後でも見られ、巻戻しもできるので、重宝している。最も迫力は映画館には及ばないが。

「山田洋次監督が選んだ日本の名作100本」という小冊子があり、家族編(50本)を持っているので、その中の未だ見ていない作品を Amazon、Netflix で探し、PC で見ている。1981年キネマ旬報ベスト1位である。第13回太宰治賞を受賞した宮本輝の同名小説を映画化した、小栗康平の監督デビュー作である。

ご覧になった方は覚えているでしょうが簡単にあらすじを述べる、大阪・安治川のほとりで食堂を営む家庭の少年と、対岸につながれているみすぼらしい舟で売春を行っている母を持つ幼い姉弟との出会いから別れまで切々と描いている。舟の姉弟は川の場所を変えて移動しているので、友達はいない。食堂の夫婦はそれを知っているが、舟の少年と息子が仲良いので食堂でご飯を食べさせたり、姉にはお風呂に入れたり、と親切に接している。

二人は天神祭りの夜店を一緒に見に行ったり、学校の同級生にいじめられているのを助けられたりと友情が芽生えていった。

あるとき対岸の舟が動く気配を見て、離れていくのを察し、舟を追いかける。友達がいなくなってしまう、遊び相手がなくなってしまう。単にそれだけではないように思うが、少年は必死に舟を追いかける。このラストシーンが感動的であった。川べりの土手を走り、舟を追いかけて、土

手が切れると陸に上がり、また追いかける。仲の良かった友達と離れ離れになってしまう、そんな悲しさを内に秘め必死に追いかける。舟はどんどん遠ざかる、最後は諦める。

少年が見つめた人生の出会いと別れが印象に残った作品であった。

小冊子の解説では、高度成長期を迎えようとしている日本社会の底辺で生きる人々を静かに映し出した名作、と言っている。//

【BS】「時をかける少女」（石毛謙一）

1983 年、日本、大林宣彦監督 出演 原田知世、尾美としのり

大林監督が、故郷尾道を舞台に作成した尾道三部作の一つ。時空を超える能力を持ってしまった少女の SF 青春映画。SF 作家で有名な筒井康隆原作の実写映画化作品。

40 年前の高校 1 年生の青春ドラマは、最近の作品と異なり、かなり甘酸っぱい香りがする。時空を超えた三角関係、プラトニックラブ、キス人形、屋上で原田知世の匂いのするハンカチを顔にかける尾美。こんなロマンチズム一杯の映画を久しぶりに見ました。

富田靖子の〈さびしんぼう〉の悲しい初恋を見せて頂いたので、第一作目の〈転校生〉を見なくてはとの思いをしております。

晩年の大林監督の作品との比較をすると、映画監督も随分撮り方が変わるもののだとの印象を受けます。//

【劇場】「テスラ <エジソンが恐れた天才>」（石毛謙一）

マイケル・アレメレイダ監督 イーサン・ホーク主演

カーボンニュートラル(CN)が、我が国の目指すべき方向との指針が出た昨今、エネルギーとしての電力が、尚更重要視される時代を迎えた。“彼がいなければ、世界は 100 年遅れていた。”とのキャッチコピーは、長年電機メーカーに勤めた私に、強烈な印象を与えた。

直流送電のエジソンと交流送電のテスラとの電流戦争。1895 年ナイアガラ滝の交流水力発電所建設によって、テスラが完全勝利する。エジソンが、日本では圧倒的に有名であるが、交流電流で今の生活が支えられている。エジソン＝GE VS テスラ＝WH で世界の電機業界は発展してきたが、クロアチア出身のテスラは、富と名声を

得ず、不遇の晩年であった。後半の無線通信で世界を結ぶ研究は、マルコーニが完成させた。革新的技術があっても、特許戦略や資金調達に失敗すれば成功できないとの事実は、悲しいものである。

単純な伝記映画にせず、孤高の天才科学者としての描きに徹した映画は、少し難解との印象を持った。そして、エジソンが、やけに俗物の印象を受ける。

万人受けするとは思えない映画を作る米国に、改めて脱帽です。電力の歴史の勉強になるので、学生に見てほしい作品です。//

【BS】「サイコ」（長谷川寛）

5月にヒッチコック監督の「サイコ」を観ました。観る者を引きつける作品でした。記憶がおぼろげで初めて見る映画かなとも思いましたが、途中から若い頃に見た映画だと思い出しました。

そのストーリーは、初めは、会社の金を横領した女事務員の逃亡劇と思いがちですが、その後一転し、異常心理を持ったモーター経営の若者の連続殺人(女事務員、それを探る探偵等)が展開されるスリルに富んだ内容でした。

1960年代のアメリカの古い時代背景の中で、観客をヒヤヒヤさせる、ヒッチコック特有の描写はさすがに今でも通用するものだと感心しました。また白黒映画と相まったバックミュージックにも緊迫感を感じました。

また、6月には、ヒッチコック監督の「間違われた男」(6月23日BSNHK3チャンネル: 1956年ヘンリーフォンダ主演・アメリカ)も観ました。冤罪事件で捕らわれ最後に真犯人逮捕により解放される内容でスリルに富んだ作品でした。

あらためて鑑賞すると名作であったと感心した次第です。皆さんにも、時々古い名画の鑑賞をお薦めしたいと思います。//

今月の情報エトセトラ

※会員の皆様から寄せられる映画関係の諸情報を＜情報エトセトラ＞として、広く掲載して行くことにしました。 今月は三木延義さんから提供いただいた情報です。

＜映画音楽を楽しめるお役立ちリスト＞

(紹介者：三木延義)

私の高校時代の友人の安田君という人が、大学時代のクラブ仲間（ワンダーフォーゲル部）の有志で「エーガ愛好会」なる集まりをつくり、映画を観て楽しみ（主にＢＳ放映の作品）、感想などをメールで交信して楽しんでいます。

最近、その愛好会で「私が好きな映画音楽」と題して皆で各自好きな映画音楽を一人15曲挙げて集計しました。その結果を事務局の安田氏がまとめたのが下記のリストです。

Youtube のサイト URL も添えられていますので、好きな映画の主題曲を楽しめるリストになっています。

安田氏（三木さんご友人）作成のリストへ ▶

<https://drive.google.com/file/d/1Uz6kjcHnb5tJsxPu1RuPV7OWd63Aguhg/view?usp=sharing>

＜映画本紹介 — チャップリンとヒトラー（大野裕之著）＞（紹介者：鈴木謙一）

＊本田さんによる紹介文の紹介：

鈴木さん、「チャップリンの影」に続いて、「チャップリンとヒトラー」大野裕之さんの作品、よくぞまとめてくれました。しかも要点エッセンスをうまく汲み取り、これ以上の要約はないと言える内容に仕上げて戴き、感嘆あるのみです。チャップリンをよく理解し、その作品に感銘を受けた人にしか出来ないポイントの受け止めだと思いました。いろいろ情報を吸収すると、あれも言いたいこれも言いたいとなり、なかなかまとめるのに難儀するところですが、本当にいい塩梅に美味しいところを取り上げられたと思います。チャップリンは自己の信念と時代の流れが共振して、生み出された芸術作品で人々の心をつかんだのでしょうね。また、御自身の読後の感想も名文で、感銘を受けました。さらに、ＢＳドキュメンタリー「チャップリンとＦＢＩ」の紹介も、赤狩り旋風がハリウッドに押し寄せてきた事情が、よく分かりました。チャップリンとその時代がよく理解できました。「ローマの休日」の脚本家ダルトン・トランボを描いた、映画「トランボ ハリウッドに最も嫌われた男」を思い出しました。映画同好会の素晴らしい財産になりました。有り難うございます。

本田安弘

鈴木さんの紹介文へ ▶ https://drive.google.com/file/d/1gGmymVa-CylrUGkFGhA9bgro_gjndzjW/view?usp=sharing

映画同好会予定表・新会員紹介

* 映画同好会 ZOOM 会 （主に BS 推薦作品を見た感想を述べ合います。 同好会会員なら自由にご参加いただけ、事前の登録は不要です。 URL は会員全員に ZOOM 会前日にお送りします。）

2021 年 7 月 19 日（月） 16 時-18 時

* 新会員紹介:

加藤賢二 さん （64 歳）

東京大学文学部社会学科卒、日本生命保険勤務後、マックス株式会社にて監査室長、本年ご退任。

編集後記

真木編集長のご努力もあり、このところ会員の皆さんからの原稿が大きく増えてきました。編集をしながら、会員各位の原稿に最初に触れさせていただく特権を楽しんでおりますが、みなさんの「知」の引き出しの豊かさに敬服しております。さすがに経験を重ねられ、さらに映画という感受性涵養の道具を十分活用されながらご自分を鍛錬された賜物だと思います。そんな貴重な原稿をお預かりして月報に掲載するのが編集部の主たる仕事ですので、もし寄稿いただいた玉稿が掲載漏れしているように感じられたら、編集部までご一報をお願いします。また、真木編集長にて月報掲載文の小冊子化というプランを温めていただいておりますが、これも近い将来実現するかと思います。引き続き、会員各位よりのご投稿をこころよりお待ち申し上げます。

なお、情報エトセトラ欄でお気づきと思いますが、画像や音楽の引用が増えております。本誌の同好会会員以外への転送には十分ご留意いただけるよう、お願いいたします。（菅）